

まめなかの

発行
西郷町城北町
隠岐病院長



輸血の歴史

血液空輸で

より安心!

胃潰瘍の出血、重症の貧血、大きな手術の際、輸血を受けた、あるいは輸血を受けた人を知っている、そんな方も決して少なくないはず。輸血と一口にいつても現在では、全血輸血、濃厚赤血球輸血、新鮮凍結血漿輸血、血小板輸血など、その目的に応じて必要な成分を含む製剤が選ばれ、一通りではありません。いったいいつ頃から輸血という医療行為が行われるようになったのでしょうか。

古くは、すべての病気が血液を含む体液の乱れによると考えられていて、瀉血（血液を体内より捨てること）をおこなない、悪い血を体内より出すことが治療とされたこともあったようです。一四九〇

年頃、ローマ法王イノセント八世が、年輩いた自分の血液と、若い青年の血液とを入れ替え若返りを図ろうとしたのが、輸血の最初として記録されています。その後、動物を用い輸血の多くの実験がなされ一六六〇年頃にはヒツジの血液を人間に輸血することが実験される様になりましたが、その結果は期待に届くものではなく、悲惨な結果を多くもたらしたようです。そんなことで一六七〇年には法律で輸血が禁止となりました。一八二九年になってやっと、同種の生物間の輸血は比較的安全であることが発見され、ヒト同士の輸血が行われていますが、それでも成功率は約四割でした。オース

トラリアのカール・ラントシュタイナーが、一九〇〇年にヒトの血液には、A B O型があることを発見し、さらに一九二三年にR h型をも発見しました。これによって輸血が比較的的安全に行われるようになりました。

ところで:

輸血という医療行為は、現在では日本中のどの病院でも行われていることですが、その歴史はまだ一〇〇年に満たないものであることを考えると、医学の発展の進歩には驚かされるばかりです。輸血は、決して毎日の隠岐病院で行われていることではありません。しかし、ひとたび輸血が必要となると、一度に大量の血液が求められることがあります。皆さんの中にも、緊急献血に応じてくださった方もおられるは

です。そんなときのために、大量の血液を病院に常備しておけばよいのですが、血液製剤には使用期限というのがあります。常に大量の血液を確保しておく、多くの人々が善意で献血してくださったものを無駄に捨ててしまうこととなってしまいます。そこで:

日赤血液センターと島根県の防災ヘリコプターの協力の下に緊急輸血に際し、必要な血液を本土より空輸することができるようになりました。これで貴重な血液製剤を無駄にすることなく、輸血用血液が足りないという心配も解消されました。医学ばかりでなく、隠岐を取り巻く医療環境は目に見えないところで少しずつ進歩しているのです。



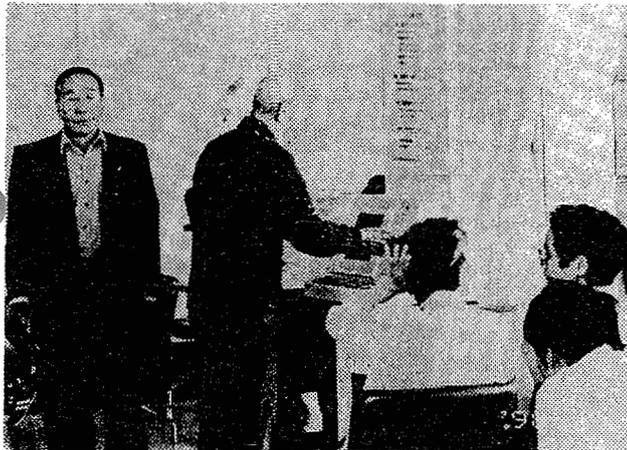
院内O A化 受付の改革

時代の流れに沿って

今でこそ、事務機器のO A化は常識的なものになっていますが、当病院が最初にO A機器の導入を思いついた頃は、本土の大・中病院のみが実施している状態の昭和五十六年頃の時でした。

事務機器導入のための検討を行なうにも、当院と同レベルの病院への導入事例が少なく、しかも、メーカーの説明を十分に得られなかったこともあって、一部の病院の視察や、カタログなどが唯一の資料でした。結局、検討中途において「これは使える！」という第一印象に引きずられた形で導入、その後、更新を繰り返してきました。そして、昨春秋、次のことを主目標に、事務機器の更新を行いました。

- ①自動再来受付機の新規導入
- ②診療録（カルテ）の一元化と中央管理化
- ③再来患者の予約制導入



7 : 4 5分になると受付機が稼働します

①の自動再来受付機は、本年一月より稼働させることができ、当初の混乱はあったものの、患者さんにも使用方法を理解していただき、現在に至っておりますが、診療録の中央管理化（診療録を医事課内ですべて管理）が移行中のため、スムーズに行っていないのが現状です。

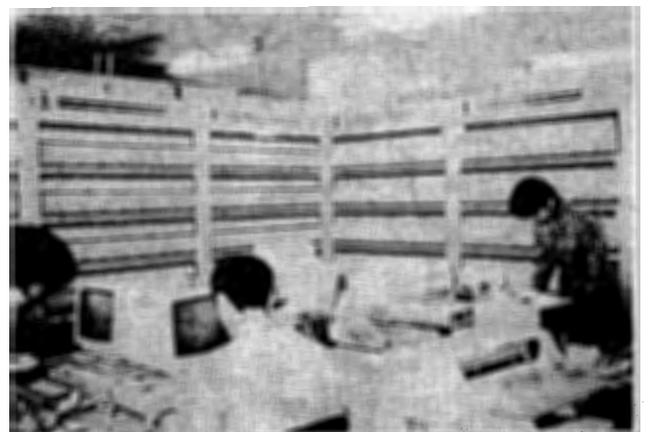
②の診療録の一元化（一患者一診療録）と中央管理化については、患者さんの各科ごとの診療録を一つにまとめ、医事課内で一元管理することですが、これは現在一元化のための診療録の整備や、カードケースの発注など準備を進めているところです。

③の予約制の導入については、すでに一部の外来において実施していますが、これを全科を通じて実施し、コンピューターで管理するように準備を進めております。

予約制を導入しても、緊急患者さんの対応や、入院患者さんの急変などにより、そちらを優先せざるを得ない場合もあります。予約で来られた患者さんにとっては、時間どおりいかず心外かもしれませんがご理解の程、お願い申し上げます。



どれをとっても長所と短所があり、スムーズに実施できるものはありませんが、待ち時間を短縮する最善の方法と考えております。皆様方のご助言、またご協力の下



約1万人分のカルテを収納します。

に進展させねばならないものと思っております。七月中を目途に、職員一同頑張っておりますが、何分にも先の見えない部分の多い仕事です。皆さんから見れば、良い知恵も湧き出ることと思っております、お気づきの点がございましたら、直接または意見箱を通じて、ご遠慮なくご意見をお聞かせいただければ幸いです。

医事課長 池田 有秀



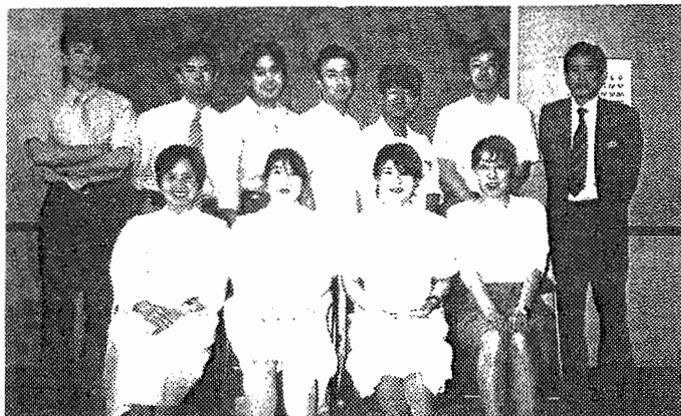
職場紹介

番外編

おかげさまで、「まめなかの」も、今回で第十七号を数えるまでになりました。今まで、隠岐病院の各部署を紹介してまいりましたが、そろそろ我々「まめなかのスタッフ」を取り上げてみたいと思います。

まず、まめなかのスタッフはいろいろな部署の人達からなり、事務局・医療技術局・看護局、そして医師と、計十四名から構成されています。まず、手順としては、自分たちで情報の収集を行ない文章にまとめる、編集作業、レイアウト、そして印刷と進んでいきますが、月一回の発行はなかなか大変なものがあります。

しかし、こうやって続けていくうちに、自然と役割分担ができてきて、記事を書く人、マンガを書く人、カット・題字を考える人、それに文句をつける人、そして出来上がった後の宴会係……。と、うまくそれぞれの得意分野をはっき



私たちがつくってま～ス!

できるようになりました。ありがたいことに、こうして出来上がった「まめなかの」に皆さんから「読んでいるよ!」と声を掛けていただいたり丁寧にお手紙をいただきます。またこれからも、もっともっとよい広報誌をつくっていききたいという励みにもなります。

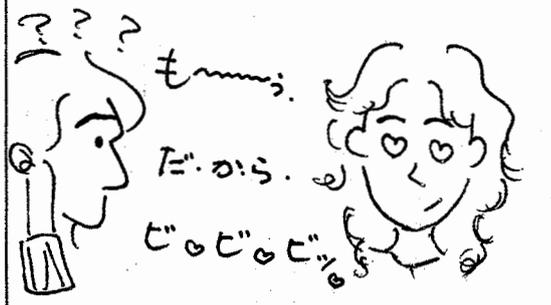
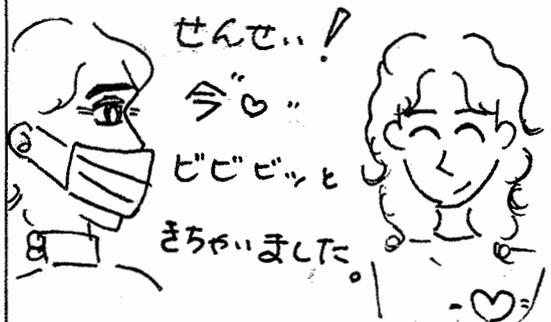
それから、「まめなかの」の発行に携わって感じることは、やはり他の部署の人達とのつながりが深まったことでしょうか。同じ病院内に勤めていても、他の部署との交流を持つ事は少なく、こうし

て月一回集まり、情報交換をしながら、同じ職場で働くという連帯感が生まれてきました。まだ、ただとどしく、とても完璧と言える広報誌とはいえませんが、それもまた手作りのよさかな!と思いつつ「まめなかの」を読んで下さる島民の皆様と隠岐病院とが少しでも連帯感が持てれば...という思いでこれからも取り組んでいきます。

それではこれからも皆さまのご意見・ご感想、そしてご質問がありましたらどんどんお寄せください。お待ちしております。

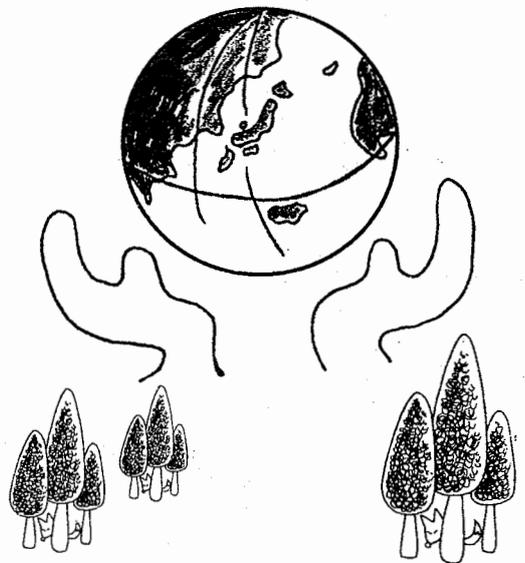
— K子 —

今時のビビビッ!いきなり4コマ作品



環境保護のススメ

皆さん、わかば石鹸というのを
ご存じですか？これは、ワークハ
ウス若葉という障害者支援施設に
通う皆さんが、いらなくなった油
を回収して、苛性ソーダなどを自
分たちの手で混ぜてつくる、文字
通り手作りの石鹸です。廃油六リ
ットルに水二リットルと苛性ソー
ダ約1kgを混ぜると、約二十個の
豆腐型石鹸ができあがります。手
作りゆえ、市販の合成石鹸のよう
な芳香と泡立ちはありませんが、
汚れ落ちにはバツグンで、頑固な油
汚れもグングン落とします。おま
けに化学成分を含んでいないため
手にも優しく、洗剤での手荒れが
気になる方は、是非一度お試しし
てください。何より、環境に優しい
もうれしいですね。



▼最近、隠岐の川や海が汚れてき
たと盛んに言われています。この
機会に、「絵の島花の島」隠岐の
環境と、障害者の支援・共生の観
点から、ワークハウス若葉の皆さ
んのことを考えてみませんか？
若葉石鹸は、島後生協日記店と
福祉ショップゆめで販売されてい
ます。

お問い合わせ先
ワークハウス若葉
二一五六九九まで

寄贈

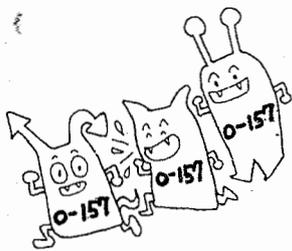
西郷町西町 池田・和好氏より
*歩行器(歩行補助器具)

病棟へ寄贈していただき
ました。ありがとうございました。

お見舞いの方へお願い

日本各地で梅雨入り宣言がなされ、いよいよ夏到来という季節になりました。ムシムシ・ジメジメと来れば心配なのは食中毒です。島根県内でも先頃、0-157の発生が報告されました。その恐ろしさは、昨年猛威をふるったことと皆さんご存じのことと思えます。地域ではもちろんのことですが、病院内での発生は絶対に避けなければなりません。と同時に、治療上の必要から食事制限を受けられる患者さんもおられます。

お見舞いに当たりましては、食料品・生物の持込みに十分なご注意をお願いします。致します。



異動

採用 一六月一

- *斎藤真由美 (パート看護婦)
- *黒田味代子 (パート看護婦)
- *門脇 愛子 (パート病棟婦)

あとがき

私たち医療従事者の守らなければいけないことの一つに、「守秘義務」があります。これは、職務上知り得た患者さんの情報を、他に漏らしてはいけないと言うものです。しかしながら、隠岐では色々なことを、何かと細かく知りがる傾向があると私は感じています。「同じ地区のあの人の具合はどうだ？」とか「親戚の事なんだから話しても良いじゃないか」と、私自身よく聞かれることがあります。患者様の立場になると、守秘義務は勿論のことですが、「そっとしておいて欲しい」「あまり事を大きくして欲しくない」と思うこともあるのではないのでしょうか？

▼病院と地域の皆様との信頼関係、それを築く為になければならない事はたくさんあります。インフォームドコンセント(説明と同意)・診療報酬明細の開示・広報誌の発行など必要な情報の積極的な提供と共に、あれこれ聞かない勇氣、これも必要なことではないでしょうか。皆様はどう思われますか？

悩める子羊 M